登場人物
シズコ
キョーコ
作家
母
父
※ 母はシズコとキョーコが、父は作家がそれぞれ二役演じる。

明転。
雨の音。と見せかけて、それは静かな轟音である。座っている二人。シズ事キョーコ。

シズコ　雨……でした。それも、激しく降っていました。風は、びゅうと吹いて、強く……傘など差すと、バタバタ、ゴウゴウと、うるさくて……。頭がおかしくなりそうな……。最寄駅まで歩くのも一苦労でした。電車に乗って、一息ついて、外を眺めると、あちこち水びたしで……。そりゃあ雨ですから……。向こうの方で、車のライトが……歪んで光っていて、近付いているのか、遠のいているのかも、よく分からないんです……。私は、それをぼんやりと見ていて……。あの人の事を思い出していました。あの人が……あの人から見た私は、きっとあんな風なんです。歪んだ車のライトみたいな……近いのか遠いのかも分からない……私はずっと近付いていたつもりだったのに……。何でか、あの人はずっとぼんやりと私を見ていて……。

キョーコ　傘が折れそうで、一度、閉じようかとも考えたんですけど……濡れて帰るのも億劫で無理矢理歩きました。傘を前に、突き出して、大股で……不格好な姿で歩きました。昔は、濡れるなんて……昔、と言っても、少し……いや、昔です。七年も経てば、昔ですよね……。あの頃はずぶ濡れになったって気にならなかったのに……なんて、ふと思い出しました。だってあの頃は、あの人が隣に居たから。

キョーコ・シズコ　雨の中で、ふと、あの人が見えたような気がしました。笑っていて……でも、泣いていたのかも。よく見えなかったんです。それに、泣くようなところ、見た事が無かったから……笑ったように思えたんです、きっと。いつも、笑っていたから……。私は、固まって、しばらくその影を、確かめて……。でも、あの人か分からないうちに、彼は、どこかへ行こうとして……焦った。

二人、立ち上がり、

キョーコ・シズコ　「待って！」

キョーコ、そのまま何かを追いかけていく。シズコ、その場に立ち尽くし、そして座る。

シズコ　「待って」……。

と、作家の男が近付いてくる。

作家　いいですか？（席……）
シズコ　ああ、はい。どうぞ。
作家　すみません。

作家、向かいに座る。しばし沈黙。作家、外を眺めて、

作家　すごいですね。
シズコ　そうですね……今日は一段と。
作家　音がねえ、ドーッと。
シズコ　ええ。
作家　外に出て、びっくりしました。
シズコ　本当に。
作家　お一人なんですか？　今日は。
シズコ　はい、まあ……。
作家　珍しいですね。
シズコ　そうですか？
作家　そりゃあ、時間も時間ですし。
シズコ　そうですね……そうかも。けれど、あなたもお一人でしょう。
作家　ええ。
シズコ　珍しいですね。
作家　そうですか？
シズコ　そりゃあ、時期が時期ですし。
作家　そういえば、そうですね……。いや、世間に疎くて。お恥ずかしい。
シズコ　……どうして？
作家　え？
シズコ　いえ、話せない事情があるなら、いいんです。ちょっと、興味本位で聞いてみただけで……。どうして今ここにいるのかなあって。
作家　いやあ、私は、間抜けな話でして……。

間。

シズコ　間抜け。
作家　乗り遅れたようなもので。部屋で唸っていたら、知らないうちに誰も居なくなっていて。
シズコ　え？
作家　物書きなんです私。ちょっと、話が浮かばなくなって家で悶々としていたら、誰も。はは、どおりで担当編集にも繋がらない訳です。

シズコ　その方はもう……。
作家　ええ。
シズコ　そうですか……。
作家　そうなんです。
シズコ　……。
作家　……あなたは？
シズコ　え？
作家　いや、話したくなければいいんです。少し、興味本位で聞いてみただけですから。
シズコ　（笑って）興味本位で。
作家　（笑って）ええ、興味本位で。
シズコ　私……人に会ってきた帰りなんです。
作家　人に？
シズコ　ええ……。
作家　その人は、一緒では？
シズコ　え？
作家　一緒に来られた訳ではないんですね。
シズコ　ああ……。そうですね。
作家　別々に行かれるんですか？
シズコ　はい……。
作家　そうですか……。
シズコ　誘う事も思いつきませんでした……。
作家　え？
シズコ　そうですよね、普通は、一緒に行こうとか、そういう話になりますよね……。私、何してたんだろう。
作家　……。
シズコ　でも、誘っても断っていたと思います。その人は。
作家　そうなんですか？
シズコ　そういう人なんです。
作家　……あのう……。
シズコ　はい。
作家　もしよかったらその話、もう少し詳しく教えて頂けませんか？
シズコ　え？
作家　あなたと、その方のお話を。そのう、申しました通り、私……ネタに困っていて……申し訳ないんですが、少し……参考にさせて頂けませんか？　いや、全て使う訳では無いんです。気分転換くらいの気持ちで……。
シズコ　私は構いませんけど……。
作家　本当ですか？　ありがとうございます。あ、ちょっと、すみません……。

作家、紙とペンを取り出す。

作家　こんな形で話を聞くのは失礼と分かっているんですが、すみません……。職業病みたいなもので。
シズコ　いえ……。
作家　お待たせしました。話して頂けますか？
シズコ　はい……ええと……どこから話しましょうか……。そうですね……。

暗転。雨音と音楽。穏やかな時間が流れる。
明転。そこはキョーコの家。シズコが座っている。と、キョーコが帰ってくる。

キョーコ　……。（シズコを見つけ、睨む）
シズコ　あらおかえり。
キョーコ　何で居ンのよ。
シズコ　いつもこんなに遅いの？　危ないわねぇ。
キョーコ　何で居るのか聞いてンのよ！　もう来ないでって言ったじゃない！
シズコ　ちょっと、近所迷惑。
キョーコ　……。帰って。
シズコ　何よ。つれないわぁね。
キョーコ　ていうか何勝手に入ってんのよ。
シズコ　合鍵持ってるもの。
キョーコ　勝手に入るための合鍵じゃない。ほんと常識ない。あんた。
シズコ　まぁ、まあ。疲れてるでしょ？　ご飯作ってあげる。待ってたのよ。
キョーコ　いらない。食べてきたから。
シズコ　あらぁ……。
キョーコ　いいから帰ってよ。明日も仕事なの。
シズコ　いいじゃない。昼からなんでしょ。
キョーコ　何で知ってるの。
シズコ　何でも知ってるわよ。アナタの事なら。
キョーコ　何なのよ……。もう来ないで。絶対。
シズコ　お姉ちゃんにその言い方は酷いじゃない。
キョーコ　アンタなんか姉でも何でもない。
シズコ　あら、ホントに酷い。
キョーコ　……。
シズコ　まぁ、まぁ。とりあえず着替えて。あったまりなさいな。ねぇ、ご飯食べてもいい？　お腹空いちゃって。
キョーコ　……。

キョーコ、着替えに行く。シズコは、冷蔵庫の中を漁りに行く。

キョーコ　（声だけ）何しに来たのよ。
シズコ　可愛い妹の様子を見に。

キョーコ　嘘ばっかり。母さんと喧嘩？
シズコ　ブー。
キョーコ　じゃあ父さん。
シズコ　　ブー。
キョーコ　ちょっと、真面目に答えてよ。
シズコ　だから、あなたに会いに来たって言ってるじゃないの。
キョーコ　……。
シズコ　ねぇ、サンドイッチ食べてもいい？

キョーコ、シズコ、同時に出てくる。

シズコ　あら、美味しい。
キョーコ　それ食べたら帰ってよね。
シズコ　でも、これ賞味期限切れてる……。
キョーコ　うるさい。
シズコ　いつもコンビニなの？
キョーコ　関係無いでしょ。
シズコ　そんなに忙しいの？　毎日。たまには自炊しないと。まぁ、アナタ元々料理上手くはないけど……。
キョーコ　うるさい。
シズコ　仕事どう？　順調？
キョーコ　関係無いでしょ、もう……。
シズコ　あるわぁよ。様子見に来たんだから。
キョーコ　嘘。
シズコ　本当よ。どうなの？　暮らしは。
キョーコ　……普通。
シズコ　普通って何よ。
キョーコ　普通は普通なの。可も無く不可も無くの。
シズコ　つまらない回答しないでよ。
キョーコ　どうせつまらない人間だし。私。
シズコ　やあね。洋二さんが見たら泣くわよ。
キョーコ　どうしてあいつが出てくんのよ。
シズコ　洋二さん、そういうの一番嫌うもの。
キョーコ　そこじゃない。もう、いい。
シズコ　すぐそうやって話を打ち切るんだから。
キョーコ　あんたは話が通じないからめんどくさくなるの。
シズコ　あらひどい。
キョーコ　全然思ってないくせに。
シズコ　思ってるわぁよ。顔に出ないの私。洋二さんにもよく言われたわぁ。
キョーコ　そうやってすぐあいつの名前出すし。

シズコ　洋二さんの事？　そんなにすぐ出す？
キョーコ　出してるじゃない、今も。
シズコ　だって、あなたにしか話せないんだもの。仕方ないでしょ。
キョーコ　何が仕方ないのよ。
シズコ　　ねぇ、デザートある？

キョーコが答える前に、シズコは立ち上がった。

キョーコ　ちょっと。勝手に漁らないでよ。
シズコ　（声だけ）ねえ、プリン食べてもいい？
キョーコ　駄目。
シズコ　（プリンを持って現れ）これ、有名なやつじゃない？
キョーコ　駄目って言った。
シズコ　どうして。
キョーコ　私が食べるの。
シズコ　アナタ、プリン食べないじゃないの。
キョーコ　……。
シズコ　誰かからもらったの？
キョーコ　別にいいでしょ、何でも。
シズコ　えー？　誰？　好きな人？
キョーコ　違う。そういう人じゃない。
シズコ　付き合ってるの？　どんな人？
キョーコ　そういうんじゃないってば。もう、とにかく、それ食べないで。戻して、冷蔵庫に。
シズコ　いいじゃない、半分こしましょうよ。
キョーコ　何でよ。
シズコ　家であんまり出ないのよ、甘いもの。父さんも母さんもそんなに食べないから。
キョーコ　自分で買えばいいじゃない。
シズコ　人と食べるのが楽しいんじゃない。二つ買って半分こずつにしたりするのが。
キョーコ　何よ、それ。そういう事はヨウジさんとすれば？
シズコ　無理よ。
キョーコ　何よ、今更。そんな事もできないの？
シズコ　そうじゃなくて。洋二さん、死んじゃったんだもの。
キョーコ　え？
シズコ　もうできないのよ。そういう事。
キョーコ　ちょっと……何よ、それ。
シズコ　何って、やあね、当たり前じゃないの。
キョーコ　そこじゃない。そうじゃないでしょ。
シズコ　　え？
キョーコ　……。
シズコ　どうしたの？

キョーコ　……。
シズコ　キョーコ？

シズコ、母に代わる。

母　キョーコ？
キョーコ　……何。
母　話があるの。
キョーコ　今忙しい。
母　大事な話なの。
キョーコ　……。
母　あのね、お母さん、今お付き合いしている方がいるの。
キョーコ　知ってる。（立ち上がる）
母　え？
キョーコ　出掛ける。
母　待って。
キョーコ　何よ。
母　知ってたの？
キョーコ　気付いてないと思ってたわけ？
母　どうして。
キョーコ　そりゃ、分かるわよ。結構長いんでしょ？　急に帰りが遅くなったの、離婚より前だったもんね。
母　それは違うの。キョーコ。
キョーコ　何が違うのよ。理由聞いてもいつも曖昧だったじゃない。仕事が忙しかったとか、何よ、それ。仕事で遅くなる事なんてなかったのに。買い物は節約し出したクセに服はどんどん新しいもの着てるし。相当貢いでんじゃないの？
母　聞いて。
キョーコ　最近じゃ遠回しに私を家から出そうとするし。今更言われても何とも思わない。どうせ今から来るんでしょ？　私、しばらく帰らないから。どうぞお好きに。
母　待ってキョーコ。
キョーコ　何。お金？　いくら。
母　違うのよ。違うの。
キョーコ　……。
母　今までの事、謝らなくちゃいけないの。あのね、お母さん。お母さん、ずっとこわかったの。何が、って言われると困るんだけれど。ずっと、怖いのよ。
キョーコ　何よ、それ。
母　分からないけれど……でも、だって、あの人はいつもフラフラしているし、あなただって、何も話してくれないでしょう。
キョーコ　そういう風に育てたの、アンタでしょ。
母　そうなの。本当は、お母さんが悪いのよ、全部。私が悪かったの。ごめんなさいね、あなた

にも寂しい思いをさせて。
キョーコ　何が言いたいの、結局。
母　そうだって気が付いたのは、すごく最近の事なの。お母さんね、それをきっと、世の中のせいなんだって思っていたの。こんなに、何か、不安な気持ちになるのは、きっと社会が悪いんだって。そんな時にね、チラシを見たの。
キョーコ　何の。
母　その……世の中を、もっとよくしようっていう団体の。この国の人々が、等しく幸せになるために活動してるっていう……。
キョーコ　それで、まさか行ったの？
母　だって、近くで講演会やっていたのよ。お母さんも、行くだけ行ってみて決めようって、思って申し込んだの。それで、お話を聞いてみたら、すごく良かったのよ。気持ちを言い当てられたような気がしてすごく安心した……。同じように感じている人が沢山いるんだって。
キョーコ　それで入会したの？　誰にも言わずに？
母　……。（頷く）
キョーコ　何て団体よ、それ。
母　「一億人の幸せを実現する会」。
キョーコ　それ、この前ニュースでやってたやつじゃない。
母　お母さんもね、おかしいなって思ったのよ、すぐに。でも、言っている事は間違いではないし、そうなればいいな、そのお手伝いができたらいいなって思って。
キョーコ　何ができるって言うのよ、そんな所で。
母　皆、いい人達だったのよ？　明るくて、勤勉で、これからの社会の事を真剣に話し合っていらしたわ。日中はボランティア活動をして、少しでも世の中のためにって……。
キョーコ　夜は？
母　え？
キョーコ　夜は何してたのよ。いつも夜が遅かったじゃない。
母　夜は……。
キョーコ　何よ。
母　とにかく……だから、彼のせいで遅かった訳じゃないの。離婚したのも彼とお付き合いする前だし。
キョーコ　言えないような事してたんだ。
母　……。
キョーコ　言えないような事に、お金貢いでたって事ね。
母　お母さんもおかしいなって、思っていたのよ？
キョーコ　そのくせ離婚してんじゃない！　訳の分からない宗教団体に洗脳されて！
母　あの人の事は関係ないのよ！
キョーコ　浮気よりひどいじゃないそれ……。
母　どうして？　確かに、普通の団体とは少し違ったかもしれないけれど、昼間は、介護ボランティアに行ったし、草抜きやゴミ拾いもした。やっている事は、清く正しかったのよ。浮気とか、そういうのよりずっと。
キョーコ　そんな事、どこかに入会したり、人に隠さなくたってできる。清く正しい人は一人で

もそういう事をしてるんじゃないの。
母　彼も同じ事を言ってくれた。
キョーコ　彼？
母　今お付き合いしている人。お母さん、その人のお陰で退会できたのよ。
キョーコ　退会した割に未練タラタラじゃない……。
母　だから、そう思ってたって話よ。彼に救われて、私、お母さんが間違っていたんだって、気付けたのよ。
キョーコ　あ、そう。
母　お母さん、彼と結婚したいの。しようと思っているの。
キョーコ　あ、そう。
母　今日、来てもらってるの。
キョーコ　えっ？

父、入ってくる。キョーコは母に、母はシズコに代わる。

父　シズコ、この人が。
母　初めまして。
シズコ　初めまして。娘のシズコです。この度は、その、どうも……。
父　シズコ、父さん、この人と結婚しようと思うんだ。
シズコ　うん……。
母　ごめんなさいね。突然の話で、びっくりしたわよね。私達も、急に決めてしまったから。
父　そうだな。お前にも、もっと早く話せれば良かったんだけど。すまん。
シズコ　いえ、私は、お父さんがいいなら、それで。
父　ありがとう。
シズコ　ううん。
父　父さん、この人とならもう一度結婚してもいいって、思えたんだ。
シズコ　そう。
母　シズコさん、私、あなたのお父さんに救われたの。だから、一生をかけて恩返しするつもりよ。シズコさんのお母さんの代わりは務まらないかもしれないけれど、新しい、いい関係を築けたらって思っているの。よろしくね。
シズコ　はい、こちらこそ。
母　キョーコの事もよろしくお願いします。
シズコ　キョーコ？
父　この人にも、娘さんがいるんだ。お前より二つ下の。
母　ごめんなさいね。今日は来れないって……。
父　これからお前の妹になる子だ。また、会う機会を作るね。
母　本当にもう、あの子ったら……。

と、大きな地鳴り。同時に、わずかな揺れ。

父　おっと。
母　何かしら。

母、様子を見に出て行く。シズコは微動だにしない。固まったまま、ぼうっと、宙を見つめている。

父　大丈夫だよ。耐震工事は済んでるから。でも、今のは地震じゃないな。
シズコ　……。
父　シズコ？
シズコ　……。
父　どうした？

父、作家に代わる。

作家　どうです？
シズコ　えっと……そうですね……どうでしょう。私からは何も……。
作家　これだけは心外だ、みたいな箇所とかあれば、言ってください。
シズコ　特には。
作家　本当に？
シズコ　ええ。すごいですね、すぐ、こんなに何ページも。
作家　いや、私なんか遅い方です。
シズコ　そうなんですか？
作家　ええ。すごいですよ速い人は。ワープロかペンかにもよるんでしょうけども。
シズコ　でも、私達から見れば、遅いとは思いませんよ。十分速いです。
作家　いや、そんな、たまたま話ができたから、迷いなく書けただけなんです。シズコさんが話してくれたから。ありがとうございます。
シズコ　いえ。
作家　言ってくれれば、修正できますので。
シズコ　いえ、今はこれと言ってありませんね。
作家　あまりこだわりが無い方なんですね。
シズコ　え？　誰がです？
作家　あなたですよ。
シズコ　そうですか？　そうですね、ない訳では、ないんですが。
作家　あれば、遠慮なく言って下さい。
シズコ　いえ、いいんです。本当に、不満がある訳ではないんです。
作家　それならいいんですが。
シズコ　ただ、あの人が見たらどう思うのかなあって、少し、考えたんです。
作家　「洋二さん」ですか？
シズコ　ええ。話してくれなかったんです。その、家族の事とか、そういう事は。どう思っていたのかとか。

作家　洋二さんの家族、というと……。
シズコ　そうです。
作家　そうですか。
シズコ　遠慮していたのかもしれませんね。私に。
作家　でも、それはそれで、もどかしいでしょう。
シズコ　少し。
作家　「洋二さん」とは、どこでお知り合いに？
シズコ　母が……キョーコの母の方が、キョーコとこっちに越す時です。よく覚えています。キョーコが、仏頂面で車から降りてきて……。懐かしい。

キョーコ、仏頂面でやってくる。

作家　それで？
シズコ　父と母が、私達を紹介し合ったんです。
（作家、父に代わり）　シズコ、このお嬢さんが。（母と同時）
（シズコ、母に代わり）　キョーコ、この方が。
シズコ　それで、一応挨拶して。
シズコ・キョーコ　どうも。
父　これから、母さんと父さん、お前達四人の生活が始まるんだ。二人には、気を遣わせた事もあったろう。でも、その分これからは遠慮せずに思った事は何でも言いなさい。我慢しなくてもいい。どうすればいいか、どうしたら幸せになれるか、皆で考えよう。
母　そうね、家族ですもの。
父　大きな荷物はあるかい？　運ぶよ。
母　ありがとう。キョーコ？
キョーコ　私、一回帰る。
母　キョーコ。
キョーコ　忘れものしただけだから。すぐ戻るから。
母　違うでしょ。
キョーコ　何。
母　「行ってくる」「すぐ帰る」でしょう。
キョーコ　……。（行こうとして、）
父　待ちなさい。帰り道で迷うんじゃないか？　父さんも一緒に行くよ。
母　あなた、荷物はどこへ運べばいいかしら。
父　ああ、そうか。ええと……シズコ、キョーコ一緒に行ってあげなさい。

母、シズコに代わる。

シズコ　一緒に行けて良かった。あの日初めて洋二さんに会ったのよね。
キョーコ　そんな昔の事覚えてない。
シズコ　本当は覚えてるくせに。

キョーコ　何なのよ。
シズコ　だってあなたが洋二さんに最後に会った日じゃない。
キョーコ　え？
シズコ　忘れものって嘘ついて洋二さんに会いに行ったんでしょ？
キョーコ　……。
シズコ　本当に覚えてないの？
キョーコ　死んだの？
シズコ　え？
キョーコ　死んだの？　あいつ。
シズコ　死んだのよ。
キョーコ　いつ。
シズコ　先月。
キョーコ　何で。
シズコ　この前、こっち揺れたの知ってるでしょ？　家が崩れて、下敷きになったんですって。
キョーコ　本当に？
シズコ　嘘つく訳がないじゃない。
キョーコ　だって。
シズコ　なあに？
キョーコ　そんな簡単に言ったから。
シズコ　知ってると思ってた。
キョーコ　……。
シズコ　誰も言ってなかったのね。
キョーコ　聞いてない。
シズコ　そうなのね……。
キョーコ　葬式は？
シズコ　簡単にね。
キョーコ　そう……。
シズコ　洋二さん、知り合い多いから結構来てたのよ。びっくりしたわ。泣いてる人も居たわ。式が終わった後、歌っている人が居た。洋二さんの曲をね、皆で。ちょっと感動した。音楽する人っていいわね。自分が居なくなっても、歌は残るもの。
キョーコ　私、そういうの嫌い。
シズコ　知ってるわぁよ。
キョーコ　母さんは行ったの？
シズコ　見なかったわ。
キョーコ　……あ、そう。
シズコ　父さんが何回か、電話したんだけど、繋がらなくて。ここ数日、帰っても来ないのよ。どこに行ってるのかしら。
キョーコ　どうせ別の男の所よ。また新しい宗教にはまってるんでしょ。
シズコ　そうなの。今度は「二億人の幸せを考える会」ですって。
キョーコ　あんな女、放っといたらいい。

シズコ　あら酷い。実の母親に向かって。
キョーコ　うるさい。アンタだって父親と仲悪いじゃないの。
シズコ　仲悪くはないわぁよ。仲良くないだけで。
キョーコ　良くないじゃない。
シズコ　それに、話したりしなくなったのは最近の事だもの。昔はよく一緒に遊びに行ったりしていたわぁ。
キョーコ　洋二さんのせいでしょ。
シズコ　違うわ。
キョーコ　嘘。洋二さんと行くようになってから、ケンカ多くなったんじゃない。
シズコ　だからって、洋二さんのせいじゃない。私が会いに行ってるんだもの。
キョーコ　そんなの関係ない。自分の娘を悪者にする父親なんていないわよ。まして、自分の嫁の元ダンナだもの。
シズコ　心配しすぎなのよ、父さんは。
キョーコ　普通でしょ。
シズコ　アナタの事も心配してたわよ。
キョーコ　うざい。
シズコ　あらひどい。
キョーコ　父さんは母さんの心配してればいいのよ。
シズコ　母さんの家出はもう慣れたのよ、きっと。最近はアナタの事ばっかりよ。この前も、電話かかってきたでしょ？

電話が鳴る。父、出てくる。

キョーコ　しつこいのよ、電話が。
シズコ　でも出てあげたんでしょう？
キョーコ　もしもし。
父　もしもし、キョーコか。
シズコ　父さんはアナタの事、いつも気にしているの。
キョーコ　何。
父　元気にやっているのかい。
キョーコ　関係ないでしょ。
父　父親なんだから、心配するに決まっているだろう。
シズコ　でもアナタは、父さんが気にする度に嫌がっているのね。
キョーコ　だから父親面しないでよ。
父　……。母さんも心配しているよ。
キョーコ　嘘。もうかけてこないで。（電話を切る）
シズコ　その度に父はじっと黙りこくるんです。

キョーコ、別の相手に電話を掛ける。　シズコ、「別の相手」になる。

別の相手　もしもし。
キョーコ　私だけど。今からそっち行くわ。
別の相手　今から？
キョーコ　だめ？
別の相手　何分ぐらい？
キョーコ　三十分ぐらい。今家だから。
別の相手　はいはい。ちょっと部屋片付けとくわー。（出て行く）
キョーコ　どうせ片付かないでしょ。近くに行ったらまた電話するわ。適当に買ってくから。
別の相手　（声だけ）はいはい。
父　出掛けるのか。
キョーコ　（驚いて）勝手に入ってこないでよ。
父　どこに行くんだ。
キョーコ　友達の家。
父　どこの？
キョーコ　どこでもいいでしょ。放っといてよ。
父　娘の心配をするのは当然だろう。
キョーコ　うざいのよ、そういうところが。
父　何？
キョーコ　父親ぶって、娘の心配心配ってしつこいところがうざいって言ってんの。家族ごっこも大概にしてくれない？
父　キョーコ。そういう言い方はやめなさい。
キョーコ　心配するならシズコのとこ行ったらいいじゃない。実の娘が男の所に行ったからって、私の所に来るのやめてよ。
父　そんな理由で言っているんじゃない。
キョーコ　とにかく、気持ち悪いの。この家は。この家の空気は。私、近いうちに引っ越すから。
父　引っ越し？　お前、何の相談もなしにそういう事を決めるんじゃない。
キョーコ　相談する事なんてない。
父　どこに行くんだ。
キョーコ　どこでもいいでしょ。
父　誰かと暮らすのか。
キョーコ　何でもいいでしょ。もう決めたの。

キョーコ、行こうとして、父に止められる。

父　何が不満なんだ。
キョーコ　全部よ。言ってるでしょ？　この家の空気が嫌なの。何でも見て見ぬふりしてるような。
父　何を見てないって言うんだ。
キョーコ　知らない。自分で考えれば？　どいて。
父　待ちなさい。家を出る話はもう一度……。

キョーコ　うるさい。

キョーコ、出て行く。

父　キョーコ！

父、出て行ったはずのキョーコを引っ張り、倒す。

キョーコ　痛い！　やめて！

父は無言でキョーコを殴る。暴力的な行為。母が後ろから現れる。

母　あなた？

父　え？

母　どうしたの？

父　ああ、いや……。

父が叩きつけていたのは、大きなぬいぐるみ。

父　埃がついていたから、払っていたんだ。

母　しばらく、置きっ放しでしたものね。明日外で干しておくわ。

父　うん、そうしてくれ。

母　キョーコは？

父　出掛けたよ。

母　（さして興味を持たず）そう。

父　君も出掛けるのかい？

母　どうして？

父　それ、新しい服だろう。

母　ああ、これ？　違うわ、出掛けるんじゃないのよ。家の中でも恰好はきちんとすべきでしょ？

父　そうかな。

母　そうよ。だらだらした服を着ると、気分もだらだらしてくるでしょう？　幸せは、幸せそうな格好をするだけでもやってくるものなの。

父　誰の話だい？

母　私達の話よ。ご飯にしましょう。今日は刺身買ってきたのよ。

父　豪勢だね。

母　しばらく買えなくなるんですって。

父　刺身が？

母　何か、漁ができないそうよ。

父　そうなのか。

と、地響き。

父　またか……。
母　最近多いわね。
父　先週は近くに落ちたんだったね。
母　この辺りももう、危ないかもしれないわ。恐ろしい。
父　大丈夫だよ。この前改装もしたし……。
母　本当に大丈夫かしら。
父　大丈夫さ。

再び、地響き。父、作家に代わる。母はシズコに代わる。

シズコ　そう言って、父はいつも母をなだめていました。
作家　お母様の行方は、今も？
シズコ　ええ。分からないんです。入っていた宗教？　みたいな団体が、それ自体が無くなってしまったらしくて。だからもう、そこにい居るのかも。
作家　最近は、急に聞かなくなりましたよね。そういう活動とか。一時期はすごかったのに。
シズコ　気が付いてしまったんでしょうね。
作家　何に？
シズコ　そんな事をしても、幸せになれそうもない事に。私も、思う時があるんです。地面が揺れるでしょう？　ぼうっと、その揺れに身を任せてみるんです。そうしていると、ふと思うんです。妹が、キョーコが、思っている事や母が不安がっている事や、父が「大丈夫」と言い続けている事が、一体何になるんだろうって。だって、何をしても、地面は揺れますから。
作家　どんなに愛しても、消えてしまった人のように？
シズコ　え？
作家　シズコさんの中には、いつも「洋二さん」の影がいるんですね。
シズコ　（笑って）素敵な表現ですね。
作家　皮肉じゃああありません。
シズコ　はい。
作家　「洋二さん」との事、お父さんはご存知だったんですね。
シズコ　ええ。隠していた訳ではなかったから。ただ、母は知らなかったんです。
作家　さすがに、言えなくて？
シズコ　いいえ。私は別に。父が、言っていなかったんです。私は母と、あまり話す機会がなかったので。母が私とあの人の事を知ったのは、洋二さんが亡くなる直前でした。
作家　何故、ばれたんです？
シズコ　あの日は、母が電話していて。
作家　珍しく、キョーコさんと？
シズコ　たまに、電話するんですけど、その度最後には母が泣いていました。多分、キョーコがいつもキツい事を言うんです。

作家　その日も、口論になって。
シズコ　ちょうど、父が帰ってきて。

キョーコ、出てくる。母に代わる。作家、父に代わる。

父　どうしたんだ。
母　おかえりなさい。キョーコが、ちょっと。
父　電話したのか。
母　あの子ったら、もう……。まだ帰って来ないって。
父　仕事も忙しいんだろう。
母　違うわよ。あの子、わざとなのよ。帰らないって、聞かないのよ。理由を聞いても、よく分からない事ばかりで。
父　何て言っているんだい。
母　空気が嫌だとか何とか……。何が不満なのかしら。
父　さあ……。
母　いつまでも子どもなんだから。
父　シズコは？
母　まだ帰って来ないのよ。
父　そうか……。
母　シズコさんは、あんなにいい子なのに。ごめんなさいね、いつもキョーコが意地を張って。
父　いや、キョーコも、戸惑っているんだろう、新しい環境に……。シズコこそ、最近帰りが遅いから。心配させてしまって。
母　いいのよ。シズコさんは安心できるもの。しっかり者で、芯があって、あなたに似て優しくて物腰も柔らかくて。母親として誇りに思うわ。
父　そうか……。
母　ご飯にしましょう。今日は牛肉なの。ステーキにしてみたわ。
父　近頃豪華だね。
母　そうかしら？
父　だって、別に特別な日でもないのに。
母　大切よ、食事は。貧相な食卓だと気分も貧相になってしまうでしょう？
父　どんな食事でも気持ち次第じゃないか？
母　そんな事ないわ。白ご飯と具のない味噌汁だけの食卓で幸せな気分になれるかしら？
父　そうだな……。状況によるんじゃないか？　例えば、嫌な事があった後でそんな食事なら、幸せな気持ちにはなれないかもしれないけれど……。大切な人と、笑って食べられるならどんな食事も美味しいと感じられるだろうし、幸せな事だと思うよ。
母　それって、私の事？
父　そうだ。家族は何より大切だ。
母　でも私は幸せだとは思えないの。
父　え？
母　あなたにそんな事を言ってもらえてうれしいわ。でも、私はそんな味気ない食事で満足でき

る自分が、想像できないの。ねぇ、それっておかしいのかしら。私って、薄情？　大切な人と笑って食べられるのに、美味しいって思えない私って、ひどい人間なのかしら？

父　そんな事はないよ。あくまで、例え話だ。

母　本当に？　でもあなたはそう思ったって事でしょう？

父　それは、そう……。

母　私、不安なのよ。何がっていう訳でもないんだけれど……。いつも怖いのよ。

父　大丈夫だよ。落ち着きなさい。

母　そう、皆そう言うのよ。あの人も、あなたも……。

父　あの人？

シズコ、帰ってくる。

シズコ　ただいま。

父　遅かったな。

シズコ　そうかしら。いつもこのくらいよ。

父　あんまり母さんを心配させるんじゃない。

シズコ　はい。

母　おかえりなさい。今からご飯よ。

シズコ　ごめんなさい。食べて来ちゃって。

母　そうなの？

シズコ　いつもすみません。

母　いいのよ。明日のお昼にでも食べて。

シズコ　そうします。

母　いいのよ、敬語じゃなくて。

シズコ　……うん。

と、大きな地鳴り。

父　近いな。

母　そうね。（テレビをつける）

シズコ　……。

父　落ちたのか、揺れたのか。

母　揺れだわ。

父　あ、この辺りって、君の……。

母　え？

父　いや、何でも……。

シズコ　大変。

母　何？

父　え？

シズコ　洋二さんの家、近いわ。

父　シズコ。
母　え？　誰？
シズコ　（父に）電話、通じると思う？　絶対、家には居ると思うの。
父　シズコ、その話は。
母　洋二さんって、誰？　シズコさん。まさかあの「洋二さん」？
シズコ　あの、って
父　シズコ、テレビを消しなさい。
シズコ　（構わず電話をかける）出ない。
母　（父に）どういう事？
父　……。
母　知っていたの？　あなたも。
シズコ　ちょっと、様子見てくる。
父　待ちなさい。
母　　どうしてシズコさんが洋二さんの事知っているの？
シズコ　えっ？
母　どうしてあなたがあの人の番号を知ってるの？
シズコ　そんな事、今、そんな事……。知らなかったんですか？
母　知る訳ないじゃない。そんな事。
シズコ　だって……。（父を見る）
母　（気付いて、父に）知っていたの？
父　……。
シズコ　言ってなかったの？
父　当たり前だろう。
母　どうして？
父　君が気にすると思って。
母　だからって、どうして隠すの？
シズコ　私、行ってくるね。
母　待って、シズコさん。どういう事？

シズコ、出ていく。

母　待ちなさいよ！
父　落ち着きなさい。
母　アナタもアナタよ。どうして私に黙ってるの？
父　余計な心配かけたくなかったんだ。
母　何を？　何を心配するの？　何かやましい事でもあるの？
父　ある訳ないだろう。
母　じゃあどうして隠していたのよ。
父　違うんだよ。隠していた訳じゃない。君にこれ以上、不安にさせるような事を言いたくなくて。

母　ずっとこのまま言わないでいるつもりだったの？
父　シズコにも何度か、言い聞かせてはいるんだ。母さんの事も考えろと……。
母　言ったら私があの人の所に行ってしまうと思ったの？
父　……そんな事思っていないよ。
母　私の事、信用してないのね。
父　君だって……。
母　え？
父　いや……。

電話が鳴る。父が出る。

父　もしもし。……ああ。え？　そうか。とにかく帰って来なさい。いいから。すぐに戻りなさい。……。（母に）亡くなったそうだ。
母　え？
父　君の、前の夫は亡くなったそうだ。シズコが確認したよ……。
母　……。
父　すぐ、シズコも戻ってくる。少し、落ち着いてから……話そう。葬式とか色々、決める事があるだろう。
母　……私、不安なの。
父　大丈夫だ。
母　そう、あの人も、そう言ったわ……。そう言っていたわ……。
父　とにかく……そうだな。そろそろ、ここも危ないかもしれない。万が一に備えて引っ越そうか。キョーコの事も考えて、職場の近くとか……探してみよう。
母　……そうね。
父　（音がして）ああ、帰って来たかな。シズコ。

父、出ていく。反対から、シズコがやってくる。母はキョーコに代わる。

シズコ　物騒ねぇ。
キョーコ　……。
シズコ　何か大変みたいよ。工場とか、止まっちゃったりして。
キョーコ　ふーん。
シズコ　この辺も結構危ないんじゃないの？
キョーコ　さぁ。この前は近くに落ちたけど。
シズコ　何が？
キョーコ　ミサイルみたいな。一軒吹っ飛んでたわ。
シズコ　危ないわぁね。
キョーコ　ていうより音がうるさい。死ぬかと思ったわ。
シズコ　物騒ねぇ。
キョーコ　他人事みたいに言って。

シズコ　そんな事無いけど。テレビ越しに見るのと、生で体験するのとじゃあ、大分違うんでしょうね。
キョーコ　今にアンタんとこもそうなるわよ。
シズコ　そうね……。母さんもいつも怖がってるわ。
キョーコ　母さんはいつもそうじゃないの。
シズコ　昔からそうなの？　母さん。
キョーコ　でなきゃ、変な宗教にはまったりしないわよ。離婚前は特に酷かった。
シズコ　そう……。あなたも大変だったのね。
キョーコ　別に……。
シズコ　洋二さんは、どうしてたの？　母さんが不安がってた時。
キョーコ　どうって、別に。心配ないとか、言ってたんじゃないの？
シズコ　そう言われて、母さんは何て答えたの？
キョーコ　知らない。でもよく叩いていたわ。あいつの事。
シズコ　物騒ねぇ。
キョーコ　……。
シズコ　洋二さんも、思ったのかしら。この画面を見て。
キョーコ　さぁ。
シズコ　洋二さんは、このテレビの向こう側で死んだのね。
キョーコ　……。
シズコ　だから、涙が流れないのかしら。
キョーコ　何よ、それ。
シズコ　他人事みたいに見えたのかなぁって。
キョーコ　「洋二さん」は赤の他人とは違うんじゃないの。
シズコ　そうねぇ……。改めて考えてみると、分からないわ。何が違うのか。
キョーコ　死んでほしくないって思えるかどうかよ。
シズコ　いつか必ず死んでしまうのに？　人は死ぬもんだって、分かっているはずなのに。本当に分かっている人って、どのくらいいるのかしら。
キョーコ　分かっていても、知らんふりしているんじゃない？
シズコ　どうして。
キョーコ　そんな事いちいち気にしていたら、暮らしていけないからよ。
シズコ　……物騒ねぇ。
キョーコ　……。
シズコ　洋二さん、映るかしら。
キョーコ　映る訳ないでしょ。
シズコ　そうね。

シズコ、テレビを消す。

シズコ　ねぇ、何か歌ってよ。
キョーコ　はぁ？

シズコ　洋二さんの事、思い出しちゃった。何か歌って。
キョーコ　何でそうなるのよ。
シズコ　キョーコ、ギター持ってなかった？　洋二さんの。
キョーコ　持ってないわよ。捨てた。
シズコ　そんな事言って、取ってるくせに。
キョーコ　取ってない。いいから、もう帰ってよ。
シズコ　えー。もう少し。
キョーコ　何なのよもう……。
シズコ　弾き語りしてほしかったのに。
キョーコ　やらないし、できないから。
シズコ　アナタ、弾けるじゃない。
キョーコ　もう何年も触ってないし。（指先を見せて）ほら。
シズコ　え？
キョーコ　硬くないでしょ？
シズコ　どういう事？
キョーコ　知らないの？
シズコ　何を？
キョーコ　呆れた。何も知らないんだ。ギター弾く人は、指先が硬いのよ。弦押さえるから。
シズコ　へぇ、そうなの。
キョーコ　あいつも硬かったはずだけど。
シズコ　洋二さん？
キョーコ　知らなかったの？
シズコ　手、あんまり触った事ないわ。全然気が付かなかった。
キョーコ　……。
シズコ　きっと硬かったのね。
キョーコ　アンタ、何も知らないの？
シズコ　え？
キョーコ　何も感じないの？
シズコ　えっ？
キョーコ　アンタの大事な人が、死んだんでしょ？　大好きだったんでしょ？　私の父親でしょ？　その人が死んだって、私に言ったんでしょ？
シズコ　そうよ。
キョーコ　悲しくないの？
シズコ　悲しいわ。
キョーコ　全然そう見えない。
シズコ　そんな事言われても。
キョーコ　これは、テレビの向こう側じゃない。
シズコ　そうね。
キョーコ　じゃ、何なのよ。その他人事みたいな風は。
シズコ　だって。

キョーコ　何よ。
シズコ　だって……。
キョーコ　本当に好きだったの？
シズコ　　大好きよ。
キョーコ　……。
シズコ　でも、何か、実感がわかなくて。
キョーコ　何よ、それ。
シズコ　悲しいんだけれど、涙が出るとか、そういう悲しさじゃないの。
キョーコ　……。
シズコ　ねぇ、明日が来なかったら、どうする？
キョーコ　急に何。
シズコ　何となくよ、何となく。どう？
キョーコ　どうって、別に……。大体、明日が来ないってどういう事よ。
シズコ　そのままよ。
キョーコ　自分が死ぬって意味なのか、それとも、もっと大きなレベルの話？
シズコ　そうねぇ……。
キョーコ　世界的なレベルで終わるなら、準備もできるかもしれないけど。ミサイルみたいなのが落とされたら、何もできないんじゃないの。
シズコ　ずいぶん現実的ね。
キョーコ　曖昧すぎるのよ、アンタが。色々パターンがあるじゃないの。
シズコ　何でもいいのよ。何となく。きっと、いつかは来るんだもの。明日が来ない日って絶対来るはずだもの。
キョーコ　……。
シズコ　最後にアナタは何がしたいか、気になったの。
キョーコ　そんなの分からない。
シズコ　会いたくなる人とか、居ないの？
キョーコ　別に。
シズコ　居るんだ。
キョーコ　何よ。
シズコ　否定しなかったじゃない。
キョーコ　居るとも言ってない。
シズコ　分かるわよ、アナタの事なら何でも。
キョーコ　何よ、それ……。
シズコ　だって、ずっと見てたもの。
キョーコ　気色悪い事言わないでよ。
シズコ　だって洋二さんに近付けると思ったんだもの。
キョーコ　全然似てないから、アイツと私。
シズコ　知ってるわぁよ。見てたもの。そこじゃないの。そういうんじゃないのよ。
キョーコ　どうでもいいけど。
シズコ　もう、そんな事もできないのね。洋二さん死んじゃったもの。

キョーコ　……。
シズコ　そんな感じなのよ。洋二さんが死んだ事って。
キョーコ　全然分からない。
シズコ　そう。
キョーコ　……アンタはどうなの。
シズコ　え？
キョーコ　明日が来なかったら。アンタは何したいのよ。
シズコ　そうねぇ……。
キョーコ　自分だってないんじゃない。
シズコ　セックスしたかったな。
キョーコ　え？
シズコ　洋二さんと。
キョーコ　……。
シズコ　でも、もうできない。私最後に何したいのかしらねぇ。
キョーコ　娘の前でそういう事、普通言う？
シズコ　だってアナタ以外に話せないんだもの。
キョーコ　迷惑な話。
シズコ　でも、怒らないでしょ？
キョーコ　呆れてるから。むしろ、まだやってなかった事に驚きだわ。
シズコ　だって洋二さん、私に触ろうとすらしないんだもの。
キョーコ　嫌いだったんじゃないの。
シズコ　ううん、違う。あの人は、私の事、子どもか何かと勘違いしていたのよ……。だから触れなかったのね。私はもう大人よって、何度も言ったのに。
キョーコ　そんな事、気にしないと思うけど。
シズコ　気にしていたと思うわ。きっと、色々思うところがあったのね。
キョーコ　……。
シズコ　何か、音波、あるでしょう？　あの、子どもにしか聞こえない音。
キョーコ　何よ、それ……モスキート音？
シズコ　そう、それそれ。この前ね、私試したのよ。聞こえなかった。
キョーコ　そりゃ、そうでしょ。
シズコ　ちょっとショックだったわ。でも嬉しかった。私、もう大人だったの。大人だったのになあ……。
キョーコ　アンタさあ。

電話が鳴る。

キョーコ　あ……。

キョーコ、出ていく。作家、現れる。

作家　やっぱりまだ、電波悪いですね。
シズコ　そうですか。（外を見て）まだ、しばらくはそうかもしれませんね。
作家　そうですね、もう少し……。
シズコ　まだ止みそうにないですね。
作家　あぁ……。人気（ひとけ）が無いと余計音が響きますね。
シズコ　全然、人が居ませんね。もう、皆行ってしまったんですね。
作家　さすがに残るって人も居ないでしょう。私なんかは、こんな仕事ですから事の大きさもよく分かっていなかったんですが、部屋を出たら、廊下に置き手紙があって。編集からなんです。「こうこう、こういう状況で大変な事になっているから、あなたも絶対に避難しなさい」と、懇切丁寧に書いてありました。それで、今ここに居る訳です。
シズコ　じゃあ、もし部屋から出ていなかったら、今も避難せずにいたかもしれないんですか？
作家　多分、そうでしょう。あるいは、置き手紙が無かったら。
シズコ　それは……危なかったですね……。
作家　けれど、結局、本当のところどのくらい危険なのか、よく分かりませんよね。
シズコ　まぁ、そうですね……。別に、国から言われたものではない訳ですし。
作家　えっ、そうなんですか？
シズコ　ええ。何か、誰かが避難するって言い出したのが、広がって、いつの間にか皆出ていったんだと、聞きました。
作家　そうだったんですか。
シズコ　だから、今から行く先に何があるのか、本当に生活できるのかも実際よく分からないんです。
作家　はぁ……。なるほど。私も、向こうで仕事を続けられるか分からないという訳ですか。
シズコ　さぁ……。不思議ですよね、よく分からないまま、それでも皆行ってしまって。
作家　まぁ、皆が「何となく」で動いた結果が、「世の中の流れ」になる訳ですから。誰が、とか、何で、は、あまり関係が無いのかも。
シズコ　そういうものなんですね……。（窓の外を見て）あ、ここ。
作家　え？
シズコ　ここ、お墓があるんです。あの人の。
作家　え、この辺ですか？
シズコ　そうなんです。少し行った所に……。
作家　降りますか？
シズコ　え？
作家　いつ、帰って来られるかも分かりませんし……。
シズコ　いえ、いいんです。
作家　少しくらいなら、待ってくれるかも。
シズコ　いいんです。もう……。
作家　……そうですか。
シズコ　はい。一度行きましたから。
作家　お一人で？

シズコ　いえ、父と。
作家　お父様と？
シズコ　ええ。式が終わって、数日後に。父と出掛けたのは久しぶりでした。なんだか緊張した……。その時も、電車で行ったんです。
作家　ああ、シズコさんの所からは一本で行けますよね。私は、乗り換えないといけないんです。
　一度、戻ってから、あの声をかけた駅で。
シズコ　分かります。キョーコの家に行く時もそうでしたから。
作家　お父様は、車は？
シズコ　持っていないんです。電車通勤だったので。母は持っていたんですが。
作家　シズコさんが誘ったんですか？　お墓参り……。
シズコ　それが、父からなんです。
作家　そうなんですか？
シズコ　私も、びっくりしました。父が急にそんな事言いだして。ずっと反対していましたから。
作家　そりゃ、そうでしょう。
シズコ　時々、私を呼び出して。

作家、父に代わる。

父　シズコ。
シズコ　はい。
父　話がある。
シズコ　今、ちょっと……。
父　大事な話だ。
シズコ　……はい。
父　出掛けるのか？
シズコ　そうだけど。
父　キョーコの所か？
シズコ　え？
父　洋二さんの所か？
シズコ　……うん。
父　やめなさい。
シズコ　何を？
父　あの男は……。
シズコ　母さんの離婚相手だから？
父　違う。
シズコ　母さんの、前の旦那さんだから？
父　そういう問題じゃない。
シズコ　じゃあ、どうして？
父　駄目だ、あの人は。
シズコ　父さんに何が分かるの？

父　分かる。
シズコ　何が？
父　色々だよ。
シズコ　色々って何？
父　分かるだろう。
シズコ　分からないわ。何がいけないの？
父　……母さんの事も、考えなさい。
シズコ　心配しなくても、洋二さん、母さんの事取ったりしないわ。
父　そういう事じゃない。
シズコ　それとも、キョーコが取られると思ってるの？
父　違う。
シズコ　いつもキョーコの事を気にしてる。
父　父親だから、当たり前だ。
シズコ　でもキョーコは、父さんが気にする度に嫌がってるわ。
父　……。
シズコ　その度に、じっと黙りこんでるのね、父さんは。
父　お前に何が分かるっていうんだ。
シズコ　分かるわ。
父　何が。
シズコ　色々よ。
父　何だ、色々って。
シズコ　分かるでしょう？
父　……。
シズコ　ねぇ、父さん、私大丈夫だから。父さんの考える色々も、きっと大丈夫だと思うの。母さんの事も。
父　……。
シズコ　私、出掛けるね。
父　待ちなさい。
シズコ　何？
父　母さんがどこに行ったか、知らないか。
シズコ　何も。母さんも出掛けたの？
父　最近、時々仕事が遅くなるみたいなんだ。
シズコ　じゃあ、今日もそうなんじゃない？
父　いや、今日は休みなはずだ。
シズコ　そう……。
父　まぁ、そのうち……帰ってくるか……。
シズコ　うん、帰ってくるわ、そのうち。

シズコ、出て行く。
父、電話する。

父　もしもし。キョーコか。……元気にやっているのかい……。

父、出て行く。母とキョーコが、反対からやって来る。

母　（気がついて）キョーコ。
キョーコ　何で居んのよ。
母　待ってたのよ。
キョーコ　何で。
母　アナタに会いたくなって。
キョーコ　帰って。
母　うん、すぐ帰るわ。
キョーコ　……。
母　帰り、遅いのね。
キョーコ　本当に、仕事で遅いから。
母　私と違って？
キョーコ　そうよ。
母　分かってるわよ。アナタは私と違うもの。
キョーコ　……。
母　洋二さんに似てるもの。
キョーコ　似てない。全然。どっちにも似たくない。
母　そうね……。元気そうで良かった。この辺は、まだ大丈夫なのね。
キョーコ　いつ駄目になるか分からないけど。
母　こっちは、ついこの前揺れたのよ。知ってる？
キョーコ　あぁ、ニュースで。前住んでた辺りでしょ。
母　そうなのよ。そうなの……。
キョーコ　何か皆、出て行くんでしょ？　安全そうな所に。
母　ええ。父さんも、そんな事言っていたわ。そこに行けば大丈夫だって。
キョーコ　ふうん。
母　アナタは？　まだここにいるの？
キョーコ　そのうち、出て行く事になるかもね。
母　そうよね、危ないものね。
キョーコ　もう、帰ったら。父さんが心配するんじゃないの。ついでに、父さんにもう電話するなって言っておいて。
母　自分で伝えてよ。
キョーコ　散々言ってるのに、かけてくるのよ。
母　心配なのよ、アナタが。
キョーコ　とってつけた様な顔して心配されても、気持ち悪い。
母　お父さん、優しいもの。アナタにも、私にも。私が不安な時はいつでも大丈夫だって言ってくれた。

キョーコ　大体の人は、そう言うんじゃないの。
母　そう、皆そう言うのよ。大丈夫、心配ないって。お父さんも、あの人も。ねぇ、キョーコ。
　お母さんね、ずっと不安だったの。何がって言われると、よく分からないんだけど、怖いのよ。
キョーコ　また、その話？　結局、何が怖いのよ。
母　分からないけど、何だか、このままでいいのかって考えてしまうのよ。普通に生活して、何も変わらないまま、毎日を過ごしていいのか、分からなくなるの。このままじゃ、いけない気がしてくるのよ。だけど、誰に聞いても、大丈夫だって、言うのよ。何も心配ないような顔をするの。毎日、普通に暮らすのよ。ねぇ、本当に心配しなくていいのかしら。私がおかしいの？
　本当に大丈夫だと思う？
キョーコ　大丈夫な訳ないじゃない。
母　……。
キョーコ　全然大丈夫じゃないわよ。
母　……そうよね。そうなのよね……。
キョーコ　どうにかしてよ。そのために、毎日夜遅かったんでしょ。
母　……気付いてたの。
キョーコ　何よ。
母　ホントは、どうにもならないって、気付いていたの。
キョーコ　じゃあ、どうするのよ。
母　分からないのよ、でも……。
キョーコ　何。
母　お母さんね、行こうと思うの。
キョーコ　どこに。
母　被害の酷い所に。まだ残っている人がいるんですって。
キョーコ　行ってどうするのよ。
母　……。
キョーコ　どうにもならないのに、同じ事続けるの？
母　はい、これ。（プリンを渡す）
キョーコ　……。
母　アナタ、好きだったでしょう？　ここのプリン。小さい頃特別な日には、あの人がこれを買って来て……三人で食べた。
キョーコ　そんな昔の事、覚えてない。
母　そう。でもいいの。
キョーコ　もう子どもじゃないから。
母　そうね。
キョーコ　……。
母　アナタも、気を付けて。早めに安全な所に行きなさいね。
キョーコ　どこよ、安全な所って。
母　じゃあね。
キョーコ　……。

母、出て行こうとする。キョーコ、追いかけようとする。と、大きな地鳴り。母、シズコに代わる。

シズコ　すごい音。
キョーコ　もう、うるさい……。
シズコ　落ちたのね。こんなに近いの初めてだわ。
キョーコ　ここも、もう駄目だって。
シズコ　え？
キョーコ　電話、会社から。職場ごと移るから、社員も一緒に移れって。
シズコ　そう……。父さんも、そろそろ出て行こうって言ってたわ。
キョーコ　どこに行ったって同じよ。
シズコ　分からないけど。そのうち、父さんから電話来るんじゃない？
キョーコ　一緒には行かないから。
シズコ　分かってるわぁよ。私も、別に行こうと思ってるし。
キョーコ　何でアンタまで。
シズコ　一人がいいのよ、何となく。
キョーコ　気まずいんだ。
シズコ　違うわ。何となくなの、本当に。一人になりたくなるの。
キョーコ　何よ、それ。じゃあ出てってよ。
シズコ　一人になったら、アナタの様子見行きたくなったのよ。
キョーコ　意味分かんない。
シズコ　洋二さんの事考えてるの。
キョーコ　……。
シズコ　ずっと、考えてるの。はじめはね、何とも思わなかったの。洋二さんが死んだ事。でもね、段々、少しずつ、そればかり考えるようになって。洋二さんの事や、父さんや母さんや、アナタの事も。……私ね、アナタの事、あんまり好きじゃなかった。
キョーコ　あ、そう。
シズコ　アナタのせいで、洋二さん私の事……。でも違うのよね、本当は。何が悪かった訳でもないのよね。色々な事が重なって、こうなったのね。
キョーコ　……そうよ。
シズコ　そうなのね……。
キョーコ　……いい加減、帰ってよ。引っ越しの準備しなくちゃいけなくなったし。
シズコ　そうね。私も荷物まとめないと。
キョーコ　母さんは……。
シズコ　え？
キョーコ　母さんは、どうするって？
シズコ　分からないわ。連絡できないんだもの。
キョーコ　そう……
シズコ　きっと、別に向かってるわよ。その、新しい団体の皆で。向こうで会えるんじゃないかしら。

キョーコ　ふうん……。
シズコ　アナタも、向こうでね。
キョーコ　はいはい。

シズコ、出て行く。作家がやって来る。キョーコの向かい側に座る。

作家　大体、こんな感じです。
キョーコ　はぁ……。
作家　どうでしょう。
キョーコ　さぁ……私からは、何とも。いいんじゃないですか？
作家　どうしてもこれだけは、みたいな所があれば、教えてください。
キョーコ　いや、特には。
作家　なら、いいんですが。いや、何か一つ書けそうです。ホントに助かりました。ありがとうございます。
キョーコ　別にそんな……。すごいですね、ちょっと話しただけでこんな話が。
作家　いえいえ。アナタのおかげです、本当に。（外を眺めて）ああ、そろそろ着きますね。
キョーコ　あの。
作家　はい。
キョーコ　売れるんですか？　本……。
作家　はい？
キョーコ　こんなご時世に物語なんて、売れるんですか？　実際。
作家　ええ。
キョーコ　本当に？
作家　ええ。よく売れますよ。こんな世の中だからこそ。不思議な話ですが、こう、色々な事が起こると……現実味が無いでしょう？　現実に。そうすると、人は本を読んだり、テレビを見たり。作り話を求めるんです。それで、そこから現実を知ろうとする訳です。「ほぉ、今、世の中はこんな事になっているのか……」と、何となく実感するんです。不思議な話なんですが。だからよく売れるんです、実際。
キョーコ　そうなんですか……。
作家　変な話でしょう？　現実の人達が、全く現実でない作り話から。……ねぇ。
キョーコ　そうですね……。

雨が降り始める。

キョーコ　あ……。
作家　降ってきた。
キョーコ　今日はどのくらい降りますかね。
作家　さぁ……。でも、見る限りでは、そんなに強くはないようですよ。

電車が止まる。作家は立ち上がるが、キョーコは座ったまま。

作家　あれ？　乗り換えですよね。
キョーコ　いえ、私は……終点まで。
作家　え？
キョーコ　人に、会いに行くんです、私。だから、まだ乗れないんです。そっちには。
作家　迎えに行かれるんですか？
キョーコ　さぁ……。
作家　危ないですよ。この先は、もう。
キョーコ　でも、まだ電車も止まってないし。まぁ、大丈夫ですよ。
作家　そうかも、しれませんけど……。
キョーコ　大丈夫です。
作家　……そうですか。
キョーコ　はい。
作家　お気を付けて。
キョーコ　ありがとうございます。アナタも。

作家、出て行く。電車が動き出す。

キョーコ　……雨でした、それは、穏やかに降っていました……。雨の中で、ふと、あの人が見えたような気がしました。笑っていて……でも、泣いていたのかも。よく見えなかったんです。それに、泣くようなところ、見た事が無かったから……笑ったように思えたんです、きっと。いつも、笑っていたから……。私は、固まって、しばらくその影を、確かめて……。でも、あの人か分からないうちに、彼は、どこかへ行こうとして……焦った。

キョーコ、立ち上がる。奥へ歩いていく。シズコ、作家が現れ、向かい合って座る。

作家　いいですか？
シズコ　ええ、どうぞ。
作家　すごいですね。
シズコ　ええ……今日は一段と。

ぼんやりと外を眺める。雨音。加えて、地鳴りのような音が、次第に大きくなっていく。ゆっくりと暗転。それらの音が、大きくなっていき、不意に、途切れた。

おわり。

ユニット・ピコ　演劇公演「けれど、あしたの話をしていた」
2016 年　10 月 20 日（木）／21 日（金）
山口市　クリエイティブ・スペース赤れんが　ホールⅡ

「けれど、あしたの話をしていた」
脚本：中野志保
装丁：村田友紀
発行：ユニット・ピコ
MAIL　unitpico@gmail.com
※　上演希望の際は、必ずユニット・ピコまでお問い合わせください。